

科学的エビデンスに基づいた リスク教育を

NPO法人食の安全と安心を科学する会理事長



山崎 毅

やまさき たけし

東京大学農学系大学院畜産獣医学専攻修了。獣医師、獣医学博士（東京大学）1985年湧永製薬㈱入社。90年米国ロサンゼルス大学医学部にて Visiting Scientist。94年米国カリフォルニア州ワクナガ・オブ・アメリカ社駐在。2000年湧永製薬㈱業務部、学術部課長を経て、2011年NPO 法人食の安全と安心を科学する会を設立理事長に就任。12年より食品コンサルタント、現在にいたる。



NPO 法人食の安全と安心を科学する会は、ノロウイルスなどによる食中毒や鳥インフルエンザなど、さまざまな食の安全と安心に関わる問題に、中立的で科学的なエビデンスを踏まえ、分かりやすく国民に情報発信する活動を2011年から続けてきた。昨年は、食の安全と安心の他にも、新型コロナウイルス感染症の拡大のもとで、エビデンスのあるリスク管理の必要性を情報発信してきた。

リスクの観点から考える

食の問題と今回のコロナ禍の問題をリスクの観点から考えてみよう。食については、食中毒なども発生はするが、コロナ禍のように、死者が多数出ているという状況ではない。ただ食品事業者も、新型コロナウイルスに感染すると、従業員の生命を危うくする安全の問題＋クラスター発生で顧客の信頼を失う安心の問題にもなるため、私どもの会からも昨年2月ごろから、全社員が社内外できちんとマスクを着用（ユニバーサル・マスク）して、リスク回避を図ることをアドバイスしてきた。そうした指摘を真摯に受け止めて対策してきた食品事業者からは、現在まで、少なくともクラスターが発生するという事態は避けられている。

学校での給食関係の事業者の方々などでも、きちんと対策をとってきたところは、大きな問題にはなっていないのではないか。ただ、学校

という場合は集団教育の場でもあるので、例えば高校などの上級の学校で生徒の自主的な活動、部活動なども含めて活発なところで、リスク管理が徹底していないと感染の危険性が高まることは事実である。

学校の関係者も含めて、国民の中には新型コロナウイルス感染症への対応の考え方に誤解が見られるように思う。例えば、「ソーシャルディスタンスを保つていれば、マスクは外してよい」という意見には危険な面が残る。互いがマスクをしていれば、リスクは無視できるほどに小さくなるが、マスクを外すと距離をとっていても安全とは限らないことがあるからである。高校等の運動部や合唱部など、呼吸が大きくなる活動もあると思うが、活動によって呼吸が通常よりも大きくなると、もし感染者がひとりでもいると、飛沫がいろんなところに届き、それを全部、拭き取るのは相当難しく、接触感染のリスクも大きくなる。

感染防止のマニュアル通りの対策をとる場合でも、その原理を理解した上で、状況に応じて対策のレベルをリスクに合わせていくという視点も必要になる。食の安全に例えてみると、ノロウイルスについては症状が出ていない人もウイルスを持っているかも知れないという難しさがあるが、今回のコロナ禍でも、同じことが言える。特に学校の場合は、飛沫感染や接触感染のリスクについて先生方が正確に理解をして、

無症状であっても感染者がいるかもしれないと考えて、マスクの常時着用や食事時は私語を慎むなど、油断をしない対策が大切である。

リスクとは「今、現在の危険」ではなく、将来起こりうる被害の大きさを示す「あやうさ加減」としてとらえるべきであり、そのリスクを日ごろから低減しておくことが、リスク管理のポイントになるのである。そのリスクをまったくのゼロにすることはできないが、対策を十分にとった上での結果なのか、対策を十分にできなかったことの結果なのかでは、同じ結果でも実は、大きく意味が違ってくる。

リスクをどう伝えるか

実際の問題としては、「リスクの評価」と「リスク・コミュニケーション」の在り方が問題になってくる。これは食の安全・安心という視点以外でも重要である。ここで、リスク・コミュニケーションとは、リスクについて分かりやすく関係者に伝えるためのコミュニケーションと、例えばアレルギーに関連する内容を分かりやすく表示している。

ただ、マスコミの中には、正しいリスク評価やリスク・コミュニケーションより、話題になっていることを「危ない、危ない」と煽る側面があることも指摘しなければならない。コロナ禍との関連で言えば、「GOTOトラベル」をめく

る報道である。例えば、テレビのワイドショーでは、「GOTOトラベルのせいで医療崩壊した」などと報じられる傾向があるが、現実には旅行事業者や交通事業者に関連したクラスターの発生は起こっていない。つまり、移動自体がリスクではなくて、感染対策が不十分な個人や事業者が感染拡大のリスク要因になっているのである。

学校関係でも、全国的な休業期間などに、保護者の中には「学校に通学させるのは危険」と考えて、子どもを休ませていた人がいた。しかし、新型コロナウイルス感染症はインフルエンザと同じで、学級閉鎖や学年閉鎖があれば、感染している人が急増しているので、学校を休ませるという判断もあってよいが、感染者が発生しておらず、感染予防策がしっかりとられていれば、リスクは無視できるので、必要以上に過敏になる必要はない。こうした点でも、リスクについて正しく伝えていくコミュニケーションが大切であることが分かる。

「GOTOイート」については、マスクを外して大人数で食事をするとき当然リスクは格段に大きくなる。食事の人数が4〜5人以内であれば、家族のみなどが相当するために大きな問題にはなりにくいですが、それ以上の人数が対面で食べて飲んで、大声になると、感染者が1人でもいるとリスクは大きくなる。

したがって、リスクが無視できるのはどうい

う条件なのか、リスクがかなり大きいのはどういう場面なのかを国民の大多数が理解し、きちんと切り分けができていくことが必要なのである。もし、「田舎のおじいちゃん、おばあちゃんに会いに行くのは危ない」と子どもたちが話しているとすれば、それは子どもへのリスク教育に少しゆがみが生じていると言える。リスク教育がしっかりとできていれば「田舎のおじいちゃん、おばあちゃんのところに行ってもマスクや手洗いをちゃんとしていれば大丈夫だよ」となるはずである。祖父母に会いに行くことと自身が危ないのではなく、マスクをしないなど感染予防対策ができていない人や施設がリスク大ということだ。したがって、感染対策ができて非感染者の移動までストップを掛けるといふ議論は正しくないのである。

学校関係でいえば、修学旅行を一律に中止するのではなく、きちんと対策を取って、マスクもした上で、規律を持って修学旅行を実施するほうが、その子どもに対して大きな教育効果となるのではないか。その際、マスクを外して食事をする時は、どうすべきかを考えるのがポイントである。例えば換気をよくし、1人1人の席の距離を十分にとり、私語をつつしめば、食事時の感染リスクを十分小さくできる。「こうすれば問題ない」とリスクの判断ができる子どもを育てることが、これからの時代に求められる学校の役割ではないだろうか。